

元禄歌舞伎若女方の動向

——藩邸上演記録を資料として——

鈴木博子

要旨 元禄期の上方で、谷島主水、荻野沢之丞、袖岡政之助といった若女方の役者が当たりを取り、その評判に注目されて江戸へ招かれた。彼らは当たり芸をもって江戸へ下り、成功をおさめて人気を確立している。

上方出身の若女方に対する人気は高く、その効果は大芝居の舞台を離れたところにまで及んだ。谷島主水と荻野沢之丞は香具店を出し、タレントショップのような形で成功している。

さらに、藩邸の記録を視野に入れると、屋敷方の座敷芝居における上演活動が確認できる。元禄十年代に谷島主水、荻野沢之丞、袖岡政之助は相次いで大芝居から退くが、引退直後から藩邸で催される歌舞伎に出演していた。町奉行所の取り締まりによって、大芝居の人気役者を屋敷方に呼ぶことが難しくなっていた中で、芝居町を退いた彼らは、人気役者を見たいという大名家側の願望に応えうる貴重な存在だった。荻野沢之丞や袖岡政之助に関しては、座敷芝居でそれぞれの当たり芸「嫁鏡」、「薄雪」を演じていたことが確認でき、役者の当たり芸が屋敷方でも喜ばれていたことが見てとれる。

また、彼らを中心に据えた座敷芝居のグループを率いていた藤田長左衛門にも注目される。彼は役者であるが、芝居町では主に作者や口上云として舞台に関わっていた。芝居町と座敷芝居との関係の近さが窺われる。

はじめに

元禄期の江戸歌舞伎において、上方から下った若女方が活躍していたことはよく知られている。特に元禄五年（一六九二）頃までの早い時期には、谷島主水、荻野沢之丞など上方で成功をおさめていた最盛期の若女方が引き抜かれるような形で下り、江戸の人々に歓迎された。上方で得ていた名声により、高給をもって招かれている点が特に注目されている。上方で評判を取った彼らの当たり芸は江戸でも人気を集めていく。

上方から江戸へ下って、さらに成功をおさめた若女方の人気は、舞台の上だけに留まらなかった。香具店を出し、いわばタレントショップのような形で繁昌したケースが知られている。また一方で、大名家の藩邸資料を見ていくと、江戸屋敷の座敷芝居で役者として活動していたことが確認できる。元禄期の江戸において、若女方の動向を捉えようとした時、商売の成功と座敷芝居での活動という二つの観点は欠くことができないものと考えられる。

江戸における座敷芝居、特に藩邸での演劇上演については、近年さまざまな記録の紹介とともに研究が進んでいる。大名家の江戸屋敷では、賓客などへの御馳走や、家中の慰みのために歌舞伎や浄瑠璃が呼ばれ、盛んに上演されていた。たびかさなる禁令の影響で、元禄期以降には芝居町の舞台で活躍する主だった役者が座敷芝居へ来演することは難しくなり、代わって、屋敷方を専門とする役者や、座の抱えになれなかった浪人役者などの活動が目立つようになる。しかし、そうした流れの中でも、名の知れた役者を藩邸に招き、大がかりな歌舞伎を上演していた事例が指摘できる。大名家側が芝居町の舞台へ寄せていた関心の高さを窺わせる。元禄期若女方の座敷芝居への出演は、こうした屋敷方からの、舞台や人気役者に対する関心に応え、かつ巧妙に利用した例として注目される。

座敷芝居で役者が得ていた収入については、武井協三氏⁽³⁾が元禄八年（一六九五）刊の浮世草子『浪花の田鶴』から、水木辰之助の「是しぜんと女方の上手にて、京へ来てたぐひなく当り、江戸へ行つては猶よく、武士かたへしのび／＼に呼ばれて様子よく、かれこれ金子二千両ためて…」というエピソードを引かれ、「辰之助が座敷芝居を披露するたにめと呼ばれたのか、それとも酒席などの相手をするため、単独で呼ばれたのかという点についても知ることはできない。ただ当時、役者が「武士かた」へ呼ばれることが、相当の収入につながったことだけは事実とみてよいだろう」との見解を示されている。

元禄期、上方から下った若女方が江戸で獲得した人気は、芝居町の舞台を離れたところでも高収入に結びついていた。本稿では、元禄期に上方から江戸へ下った若女方、谷島主水、荻野沢之丞、袖岡政之助の三人の役者について、藩邸上演記録を主な資料として、その動向を辿っていきたい。

一

谷島主水は元禄元年（一六八八）五月、大坂・嵐座『大織冠⁽⁴⁾』で「源内女房」役を勤め、長刀で戦う女武道を見せている。特に当たりを取った得意芸は傾城事であつたらしい。寛延二年（一七四九）刊『役者花双六』江戸巻、市川海老蔵条に「むけんの鐘の狂言と申すは元禄巳のとし。てうど今年で六十一年いぜん。大坂荒木与次兵衛座にて。若女形谷島主水。けいせいさよの中山⁽⁵⁾の中に。けいせいうらばと成て。むけんの鐘をつく所作事がはじめにて」（Ⅱ③五七六）とある。元禄二年（一六八九）大坂・荒木座「けいせいさよの中山」で谷島主水が傾城「うらば」を演じ、その演技が無間の鐘の所作事の嚆矢となつたことが伝えられている。

谷島主水にとって、さらなる当たり芸となったのが、元禄三年（一六九〇）度、大坂・荒木座「夕霧七年忌」で演じた「夕霧」である。『役者大鑑合彩』いろは丁の谷島主水評では「はじめたく夕きり十三年忌じや……此狂言に大坂中朝むくをきに茶つけめし。とちやをそしとのどをとばし。爰を大事と見物す。まづ此君難波津の川竹となりて。坂田とのせりふ。いきごみのくぜつとなり。なみだをながすありさまには。いかなむさし坊もしびりをきらして。たゝん事を忘るゝ……さすがの荒木此人を抱置るゝ事。分別の分に百貫目あり」（Ⅰ③三九九）と、大評判になったことが記される。

そして、夕霧役の成功で名声を高めた谷島主水は、その人氣に注目した興行主に招かれて江戸へ下り、元禄三年（一六九〇）十一月から市村座に出演する。『役者大鑑』（岩瀬本・A類板木部分・元禄五年）の谷島主水条には、「しのかみならずけいせいごとになつては死んだ小太夫已後の名人それゆへ此人の夕ぎりを江戸の座もとがきゝをよび、むまの霜月より末の十月までお江戸しばるのつとめ。しかも何やらが高直にあつたげな」（Ⅰ①三四六）と見えている。夕霧の評判を聞き及んだ江戸の座元が、高給によって引き抜いたという経緯が知られる。

谷島主水が江戸下りの顔見世に演じたのは、言うまでもなく当たり芸の傾城事であった。元禄十三年（一七〇〇）刊『役者万年曆』江戸巻、宮崎伝吉条に「ぬれごとやつし事。けいせい買の大じんあぢをめさるゝ。午の年谷島もんど殿初下り。子の顔みせ辰之助とのけいせい名取川などにて。しれてあれば。是以て評判に及ず」（Ⅰ②五三〇）とあり、元禄三年（一六九〇）、谷島主水が江戸の顔見世で、宮崎伝吉を相手として傾城事を演じたことが確認される。

大坂で得ていた名声を力として、谷島主水は江戸でも成功をおさめていった。ただし、元禄六年（一六九三）刊『古今四場居色競百人一首』谷島主水評に「此君元禄四の年京都より江戸の花の市村座へ来臨有て……過し比の女ゆりわか古今のまれもの。むかしよりあのやうなやつしこなししたまふ人聞たこともなければ此人大名人にきわむ。め

ぐりあいてはゆりわかをなごりにしてみゑたまはざりしにこそより大芝居へ出御有ことをうれしく思ひて、くも隠れにし御ぜんせいとゆひたてにする事とぞ」(I①四九一)と記される。江戸へ下った元禄四年(一六九一)度には、「女ゆりわか」で「大名人」との好評を得たが、それを最後に元禄四年十一月からの一年間は江戸の大芝居に出演しなかったらしい。その間の動向については不明である。そして、翌元禄六年(一六九三)度には再び大芝居へ出演する。

江戸・中村座の抱えとして大芝居に復帰した谷島主水は、ライバルとの競演という試練に遭っている。京で若女方として人気を博していた荻野沢之丞が、やはり京で名声を得た当たり芸「嫁鏡」を引っ提げて江戸へ下ってきたのである。この時の様子については、正徳三年(一七一三)刊『役者座振舞』江戸巻、中村伝九郎条に詳しい。「狐會こんけいの所作事。是廿二年以前申ノ霜月に谷島主水殿もんど。荻野殿おぎのが初下りの嫁鏡よめかみに大きにけおされ。主水殿が杉しんの森もりの稲荷いなりへ。きせいして当られし。方便ほうべん信田妻つまに其まゝ」(I⑤一七〇)とあり、元禄五年(一六九二)十一月に下ってきた荻野沢之丞の「嫁鏡」におされ、中村座が不入りになったのを、谷島主水が狐會の所作事で挽回したことが知られる。⁽⁹⁾

こうして、谷島主水は江戸での人気を確立し、元禄七年(一六九四)刊『役者節用集』では、江戸の若女方の最上位とされる。「上一ておひ事 一遊女事 上一狂女事 一しうたん吉 上一やつし事 一官女事吉 右之分古今外にるいなし ▲にせ若衆事古今無双▲丹前のふり出し外にるいなし」(I①五七六)のように、遊女事だけでなく、「手負い」や「にせ若衆」など、幅広い芸で高く評価されている。

しかし谷島主水は、いまだ若女方として衰えが見られぬうちに舞台を引退する。今のところ、大芝居で最後に確認できるのは、元禄九年(一六九六)七月、森田座「平親王正門」の「みたいききやう(御台桔梗)」役である。⁽¹⁰⁾この時の演技については、宝永七年(一七一〇)刊『役者謀火燧』江戸巻、滝井半之助条に「けいせいよしのに似せ紫ぼ

うし。とめ袖かいどりにて。為朝半三郎殿方へ行。女のうつりしれたお上手。是昔平親王村山平十郎殿へ。谷島殿夕霧と成せられし格」(一④四三六)とあるのが手がかりになる。おそらく御台桔梗が、にせの傾城になって平親王正門に会いに行くという設定で、谷島主水の当たり芸「夕霧」の傾城事を見せたのだろう。

元禄十年(一六九七)本『役者大鑑』袖崎歌流条に、「谷島主水は丑の年は休ぶんにてきやらの油毎日廿五貫づゝの賣出しはおびたゝしい事」(一別七一)とあり、谷島主水が元禄十年から舞台を退き、伽羅の油店を出して繁昌したことが知られる。谷島主水の役者としての人氣が、商売の成功に繋がったと見られる。このあたりの事情を窺わせる話として、元禄十一年(一六九八)刊『初音草嘶大鑑』(『嘶本大系』第六卷、昭和五十一年・東京堂出版)の四ノ二十六「名は色による野郎餅」を引いておきたい。

さる所のもちや、野郎餅といふあんもちを仕出しければ、めづらしき名ともてはやし、大分うれける。あるひは荻野沢之丞がすき油、水木辰之介が紋たばこなどゝて、ことのほかはやりければ、ある膏薬屋つくゝとおもふやう、このしなゝはつねの物なれども、野郎の名をかたどるゆへにはやるは、すこしの品のつけやうなり。此ほうのかうやくにも名のつけやうあるとて、谷島主水あかぶりのかうやくと、かんはんを大筆にみしらせた。

これは、役者の人氣にあやかろうとして、あかぎれの膏薬という、まったく不似合いなものにまで役者の名前を付けてしまう滑稽さを表現したものである。早くに延宝六年(一六八〇)刊『宇喜蔵主古今咄揃』(『嘶本大系』第五卷)二ノ十に、「吉弥かうやくの事」という類話も見えている。『初音草嘶大鑑』のこの話からは、上方から江戸へ下った若女方の荻野沢之丞や水木辰之介の名前によって梳き油や煙草が売れており、同様の商品効果が期待できる人氣役者として、「谷島主水」の名が認識されていたことが見てとれる。

実際に、谷島主水が出した油店(香具店)は、その人氣によって成功をおさめたようである。安永三年(一七七四)

刊『役者全書』（『日本庶民文化史料集成』第六卷、昭和四十八年・三一書房）で「古今役者香具見世」を紹介する項目に、「谷島主水 桃町四丁目 谷島忠重 元禄の始若女形上手、わけてけいせい事よく、夕霧杯にて名をあぐ。元禄十丑年、舞台休分にて見世をひらき大きにはんじやうし今にさかふ」と記され、谷島主水の開業した香具店が、安永頃まで存続していたことを確認できる。

このように、大芝居を引退した谷島主水は、役者を廃業して、香具店の商いへと転身したかに見える。しかし、若女方としての人気を利用できる収入の手段は、商売だけではなかった。藩邸資料を視野に入れると、芝居町の舞台を退いた後も、屋敷方の座敷芝居では役者として活動が続けていたことが知られる。その動向は、大芝居を退いた直後の元禄十年（一六九七）から辿られる。谷島主水に関して、現段階で確認される三件の上演記録を挙げておく。

① 姫路藩『榊原文書』⁽¹⁾ 元禄十年（一六九七）九月十六日条

為御地走、狂言尽有之。谷島主水被召寄

② 対馬藩宗家『江戸藩邸毎日記』⁽¹²⁾ 元禄十一年（一六九八）二月十九日条

今日、為御慰、御隠居所へ谷島主水座被召寄、歌舞妓御見物被遊

③ 守山藩『守山御日記』⁽¹³⁾ 元禄十一年八月四日条

松林院様、小河町様、為御馳走、狂言師被召寄候に付……

太夫 谷島主水

惣役者拾六人

右之通被為召、於御式台上之間、狂言被仰付候。

三件とも大名家の江戸屋敷における上演記録である。姫路藩邸、対馬藩邸、守山藩邸で元禄十、十一年に谷島主水

が呼ばれ、歌舞伎を上演している。②には「谷島主水座」と表記され、③では「太夫 谷島主水」とあり、谷島主水を中心とする座という単位で活動していたことが知られる。③の記事には「惣役者拾六人」という座の構成人数も記載されている。

当時江戸に藩邸を持っていた三百近い大名家のうち、現在まで文書が伝存しているケースは限られる。さらに調査が及んでいる範囲内で、しかも演劇上演の記載が見出される資料となると、かなり限定されてしまう。そうした条件のもとで三件の上演記録が確認されていることから推して、谷島主水を中心とする座は、この時期あちこちの藩邸に呼ばれて歌舞伎を上演していたと考えてよいだろう。

元禄期、歌舞伎役者が屋敷方に来演することに対して、町奉行所の取り締まりは厳しく、実態に応じて様々な禁令が出されていた。その経緯について、林公子氏⁽¹⁴⁾は「たび重なる厳しい取締りのためか、元禄期になると、芝居町の役者が大名屋敷を訪れている例はだんだん少なくなり、そのかわりに、町人を名乗る、すなわち禁令の対象ではなかった者たちによる大名家での歌舞伎上演の例が目立ってくる。奉行所側ではこの新たな現象に対処するべく、取締りの対象者の範囲を広げた禁令を出し、新たに大名屋敷に向くようになったこれら非芝居町の役者たちを取り締まるようになった」と述べておられる。

芝居町で活躍する主だった役者を屋敷方に呼ぶことが難しくなってくる中で、大芝居を引退して町人という立場になった役者は、座敷芝居で人気役者の芸を見たいという大名家側の希望に応えうる貴重な存在であった。江戸で屈指の人気若女方であった谷島主水のもとに、屋敷方からの出演要請が殺到したであろうことは想像にかたくない。残念ながら、谷島主水が座敷芝居でどのような演技をしていたのか、具体的に示す資料は今のところ見出せていないが、おそらく大芝居で評判を取った「夕霧」の傾城事など、当たり芸を中心に上演していたと推測される。

このように、谷島主水は芝居町を引退した後、大芝居で確立していた人気を基盤として、香具店の商売を成功させるとともに、座敷芝居を回る上演活動でも高収入を得ていた。

また、守山藩『守山御日記』には次のような記事が見えている。

④元禄十二年（一六九九）閏九月六日条

小川町様、御奥様へ被為入候。松林院様にも被為入候に付、為御慰

太夫 谷島小主水

右被為召、狂言被仰付候。惣役者拾三人、其外拍子方参候。

「谷島小主水」は若女方の役者で、元禄八年（一六九五）刊『役者大鑑』で「ずいぶん諸げいに気をつけ情を出してすへく谷島の家を。つぐやうにしたまへ」（I②四三）と記され、谷島主水の後継者と目されている。谷島小主水も、元禄九年（一六九六）七月の森田座「平親王正門」を最後に、以降は大芝居への出演は見られなくなる。おそらく、谷島主水と同時期に芝居町を退いたのだろう。そして、④の記事に見られるように、谷島主水座というべき座敷芝居の団を率いる「太夫」を勤めることもあったらしい。この時に限って、何かの事情で代行したのか、あるいは谷島主水が亡くなるなどの理由で本格的に後を継いだのかは不明である。しかし、谷島主水の人気を基にして始めた座敷芝居の活動が、本人が不在でも成り立つようになっていたことは興味深い。屋敷方では、同じ顔触れの役者が繰り返し呼ばれる事例が多く、座敷芝居のグループに大名家が顧客として付くという関係が見受けられる。谷島主水座も藩邸との間にそうした関係を築き、それは主水から小主水へと引き継がれていったのだろう。

大芝居を引退した若女方が、藩邸での座敷芝居に來演したケースとしては、他に荻野沢之丞の例が知られている。

荻野沢之丞は先にも触れたように、谷島主水とほとんど同じ時期、やはり上方から江戸へ下って人氣を集めた若女方の役者である。元禄四年（一六九二）、大坂から京の万太夫座へ移って、「嫁かゞみ」の「正木女房おさか」役の演技が当たり、名声を高めた。そして、この評判に注目されて、元禄五年（一六九三）十一月には江戸へ招かれ、「紅梅嫁鏡」で当たり芸「正木女房おさか」を演じて大当たりを取っている⁽¹⁵⁾。

「嫁鏡」は荻野沢之丞の当たり狂言として確固たる位置を占め、元禄十五年（一七〇二）刊『役者二挺三味線』大坂巻、荻野沢之丞条で「此度二の替りに。御家のよめかゞみ大あたり。三ヶ津にて以上四度のよめかゞみに一度もあたらざるはなし」（I③二八一）と評される。「四度のよめかゞみ」とは、元禄四年（一六九一）の京・万太夫座、元禄五年（一六九二）の江戸・森田座、元禄十四年（一七〇一）京・夷屋座、元禄十五年（一七〇二）大坂・松本名左衛門座での上演である。このうち、元禄十五年の「日本嫁鏡」については狂言本が伝存する。早稲田大学演劇博物館所蔵本は上巻のみであるが、高野正巳氏⁽¹⁶⁾が滝野英二氏⁽¹⁷⁾所蔵本の内容を紹介し、荻野沢之丞の演技について具体的に考察されている。それによると、沢之丞演じる正木女房おさかは、主君を守るため、姑に離縁を言い渡され、さらに目前で幼い息子を殺されることにも耐え、長刀で奮戦する。また、夫との再会の場面では、非人となった身を憚って恨み言もはっきりとは言えない悲哀や、夫への情愛を見せる。その後、夫と間違われて槍で突かれ、手負いとなりながらも敵を斬り倒すという女武道が見せ場として展開している。

京から「嫁鏡」の名声をもって下った荻野沢之丞は、江戸でも最高の若女方として人気を確立する。しかし、最盛期にあった元禄十二年（一六九九）に大芝居を引退し、香具店の商いをしている。元禄十二年刊『役者口三味線』荻野沢之丞評では、「去かほみせから。まづおやすみなされます。則ふきや町に伽羅の油みせを出され。ぬしの名代にて大ぶんうれると申ます。扱此人江戸はつかうのじぶん。大あたりのげいおほき中に。まづ初て下られし年のかほ見せに。宮崎伝吉殿。とあいてになつてのよめかゞみ。京にもまけぬ大あたり……たゞま一度ぶたいでの御おもかげが見したい」（I②二四二）とあり、香具店の繁昌ぶりや変わらぬ人氣が伝えられている。

沢之丞は、舞台への復帰を待望する人氣の高さや、森田座と一家になるなどの事情もあり、この翌年には大芝居に復帰している。元禄十三年（一七〇〇）刊『役者万年曆』荻野沢之丞評では、「数年の手がらに。こかね花咲飯田町へ引こみ。香具屋の藤十郎殿と。世の人に猶しのばれ給ふ事。衆人愛敬の御からだに。仕合の足手ついたる。御生れ付とや申さん……去霜月朔日よりのかほみせ。狂言。当世小国かぶき。則此君かぶきの太夫お国になり……又の勒をいたしませふが。御見物様方の何とか思召ませふ。こなた云わけて下されと。山名を頼み。母のいさめ。又は御病気のやうす。森田の一家になられし様子。町へ引こまれ御養生にて本服のやうす。伝吉と嫁鏡已來のなじみのやうす。伝吉の口上済で。あの口上にほだされ。又は一ツ家ゆへもだしがたく。又しばゐを勒まする」（I②五二九）というように、宮崎伝吉の口上によって、舞台復帰の挨拶をした様子が記されている。

大芝居を離れていた元禄十二年（一六九九）、荻野沢之丞は香具店の商売だけに専念していたわけではない。屋敷方の座敷芝居には役者として出演していた。岡山藩『日次記』⁽¹⁸⁾元禄十二年四月十八日条に、「御前様、御姫様方御振廻に付、為御見物、沢之丞参」と見えている。さらに、『弘前藩庁日記』⁽¹⁹⁾元禄十二年十月二日条で、荻野沢之丞を中心とする「歌舞妓狂言」の座が呼ばれ、「嫁鏡」三番続を上演したことが知られる。この上演について、林公子氏は⁽²⁰⁾

「荻野沢之丞はこの時『嫁鏡』という沢之丞の枕詞のようになった最大の当たり狂言を上演しているが、一時的に役者を廃業していた時期で、正確には芝居町の役者ではなかったし、共演したのは芝居町の役者とはいえ、もはや老優の藤田所三郎と、評判記には名前の挙がってこない役者たちであった」として、町人であるということを取り締まりに対する隠れ蓑にして、藩邸の歌舞伎に來演したケースと位置づけられている。

以上のように、元禄前期の江戸で若女方として一、二を争った谷島主水と荻野沢之丞の動向を辿っていくと、同じような道を進んでいることが見てとれる。二人とも上方で若女方として評判を取り、その当たり芸を引っ提げて江戸へ下って人気を確立した。そして、役者としての人気によって香具店を成功させている。さらに、その一方で大芝居を退いた際には、屋敷方での座敷芝居に來演し、愛顧を受けていた。特に荻野沢之丞は、藩邸で当たり狂言「嫁鏡」を上演していることが確認され、当たり芸というのが江戸の人々の共通認識になっていた実態を、具体的に示す事例として捉えることができる。

三

このように、荻野沢之丞らは、大芝居で人気を得た当たり芸の価値を、座敷芝居で有効に利用していた。同様のケースとして、もう一人、袖岡政之助の例が挙げられる。袖岡政之助は大坂で人気を集めた若女方であり、谷島主水や荻野沢之丞と同じように、やはり江戸へ下って、好評を得ている。元禄六年（一六九三）刊『古今四場居色競百人一首』袖岡政之助条に、「此ぬれは大坂と云所諸わけぬれことやさしく小町をみこなして名たかくすみたまふを、さる人多年のねがいにてやくそくをたがへす、よくも下る袖岡とほんそうする也……七殿とのぬれこと業平の悪性男小町

のいたつら女の出合も是程むまきは有まし。かほ見せのうすゆき其後のくづは古今の見物」(I①四七五)とある。大坂から江戸へ下って歓迎され、中村七三郎を相手役として演じる濡れ事が人気を集めたことが知られる。初下りの顔見世には「薄雪」を上演し、好評を博した。

この時の「薄雪」については、別稿で詳述する予定であるため、本稿では関係する事項のみ簡単にまとめておく。袖岡政之助が大坂から江戸へ下って顔見世に「薄雪」を上演したのは、元禄元年、二年、三年のいずれかの十一月と推定される。これは、中村七三郎の園部右衛門、袖岡政之助の薄雪が共に当たり役となるほどの成功をおさめ、特に二人が演じた濡れ事は、江戸の人々の記憶に長く留められた。

しかし、袖岡政之助は元禄十年代には三十歳を越え、やや容色などに衰えが見られたようで、元禄十三年(一七〇〇)三月、江戸・山村座「うす雪今中将姫」では、自らの当たり役「薄雪」ではなく、「東之助女房」を勤めている。狂言本⁽²¹⁾には「折節女房産月にて、腰を痛み居る所へ来かゝり、薄雪をば奥へ入れ、弥五之進は味噌を摺り、東は腰を抱き、やうく平産させて居る所へ、中辻弾正来り、薄雪が首遅なはる早々討つて出せ。東、成程畏りましたと奥へ入り、女房が首を討ち、顔に血を塗り持ち出れば」とある。急なお産であわてる滑稽な場面の後、薄雪の身代わりに東之助が女房の首を討つという展開になっている。おそらく袖岡政之助は、産後まもなくして夫に討たれなくてはならない愁嘆を演じたと推測される。

袖岡政之助は、若女方としての限界を感じたためか、元禄十三年(一七〇〇)度を最後に芝居町の舞台を一旦退いている。その後、宝永八年(一七二一)刊『役者大福帳』江戸巻の水木竹十郎条に「地芸の巧者成事。赤坂^{あか}へ引込給ひし袖岡政之助殿に其まゝ」(I④五五六)と見え、赤坂に隠棲していたことが知られる。そして、正徳二年(一七二二)度から、十一年ぶりに大芝居に復帰し、花車方の役者として活躍することになる。

<p>元禄十三年（一七〇〇） 十二月二日 鳥取藩邸</p>	<p>元禄十四年（一七〇一） 十一月十一日 加賀藩邸</p>	<p>元禄十五年（一七〇二） 三月十九日 対馬藩邸</p>
<p>『覚書』（鳥取県立図書館蔵、 207／22／郷土WH） ※土田衛氏のご教示による。</p> <p>『薄雪四番続』 第一 門出のよひ男ふり 第二 門出のよひ女ふり 第三 門出のよひ笑顔 第四 門出のよひ御国風</p> <p>園部左近 又右衛門 大村造酒丞 伝二郎 裏川惣内 新四郎 うすゆき 袖岡政之助 いもと 勝弥</p>	<p>『政隣記』（金沢市立玉川図書館蔵、 16・28・11） 『為御馳走、伎芸者袖岡政之助等被召寄』 『御用番方留帳』（16・41・95） 『蓬萊山 惣役者不残…立役 又太郎 長左衛門』 『薄雪物語三番続』 第一 御出のよひ女ふり 第二 御出のよひ男ふり 第三 御出悦ふ御国入</p> <p>うす雪 袖岡政</p>	<p>『毎日記』（長崎県立対馬歴史民俗資料館蔵、国元・奥書札19） 『為御慰、藤田長左衛門座狂言被召寄…』 『薄雪ゑもん桜三番続』 第一 門出のよい女ふり 第二 門出のよい男ふり 第三 門出のよいむこのふり</p> <p>そのへのゑもん 三郎四郎 造酒之丞 又太郎 浦川新介 新四郎 薄雪 政之助 妹 奥州</p>

引退していた十一年間の動向は不明であったが、藩邸資料を調査することによって、座敷芝居では役者として活動していたことが確認できる。大芝居を引退した直後の元禄十三年（一七〇〇）十二月から、元禄十四年、十五年にかけて、三件の上演記事を見出せる。表にまとめて示しておく。

三件ともに、「薄雪」の続狂言が上演され、表で傍線を引いて示したように、いずれも「薄雪」役を袖岡政之助が演じている点に注目される。袖岡政之助の当たり芸「薄雪」を中心に据え、座敷芝居を回っていたことが知られる。既に大芝居では、袖岡政之助が「薄雪」役を演じることはなくなっていたにもかかわらず、屋敷方では、なお当たり

薄雪母	次郎三郎	火しや方	薄雪母	左兵衛
うは	又三郎	か <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>		
こしもと	吉弥			
音羽之介	やしほ		音羽之助	数馬
遠藤寺弥太夫	長左衛門		利倉四五衛門	長左衛門
はたこや	丹三郎		旅籠や	丹三郎
女はう	喜八		女房	菊之丞
郡司男之助	又太郎		香織之助	弁之助
ねこ七変化	竹斎			
旅人	かつま			
	清九郎		下人	三郎四郎
			おさよ	万太夫

芸として認識され、喜ばれていたようである。

さらに着目しておきたいのが、表で波線を引いた「藤田長左衛門」である。元禄十五年（一七〇二）三月十九日、対馬藩『毎日記』の記事で、「藤田長左衛門座狂言」と記されるように、この座敷芝居のグループを率いていたのは藤田長左衛門であった。先述の、荻野沢之丞が元禄十二年（一六九九）十月二日、弘前藩邸で「嫁鏡」を上演した際にも、『弘前藩邸日記』に「一 銀子式枚 荻野沢之丞 一 金子百足 藤田長左衛門」とあり、やはり座敷芝居のグループの頭目として名が挙げられている。藤田長左衛門の率いるグループの上演記録は、『弘前藩邸日記』元禄十五年（一七〇二）三月六日条にも見られる。

つまり、藤田長左衛門は十数人規模の役者集団を率いて座敷芝居で活動しており、その上演活動の中で、元禄十二年（一六九九）には荻野沢之丞の「嫁鏡」を中心演目に据え、元禄十三年（一七〇〇）からは袖岡政之助の「薄雪」を中心としていたと捉えられる。大芝居における当たり芸が座敷芝居でも喜ばれ、屋敷方の愛顧を得ていた実態が窺われる。

藤田長左衛門は、立役の役者だったらしく、元禄七年（一六九四）刊『役者節用集』には、江戸の立役の二十五番目に記載されている。しかし、役者として大芝居で成功することはなかったようで、以降は評判記に名前が挙げられていない。むしろ注目されるのは、作者としての活動である。初代市川団十郎の元禄九年（一六九六）願文²²に「其外出来たる作者ども、十五兩より取はじめ、或は式拾五兩、三拾兩がせきなるべし。此たぐいはぶんけいかうりん、藤本、藤田、外に作者の名をとりしもの山左衛門也」と、作者として名が挙げられている。『寛閑役者片気』下之巻『八文字屋本全集』第二巻、平成五年・汲古書院）にも「此狂言をもくろみ、富永平兵衛、藤田長左衛門などか。思案をからずに仕組ましたが。見事しあてたさふにござる」と見えている。

また、宝永七年（一七一〇）刊『役者謀火燵』江戸巻、中村座・中村伝九郎条では「扱口上云長左衛門段々の口上」（④四二六）と見え、藤田長左衛門が「口上云」として大芝居の舞台に上がっていたことが知られる。このように、藤田長左衛門は大芝居で役者としてよりも、作者や口上云として舞台に関わりを持っていた。芝居町とそうした関わりを持っていた人物が、一方で座敷芝居のグループを率いて活動していたということになる。芝居町と座敷芝居との関係の一端が窺われて興味深い。

おわりに

元禄前期の江戸で活躍した若女方は、先に上方で名声を高め、その評判に注目されて江戸へ招かれている。谷島主水、荻野沢之丞、袖岡政之助の三人は、いずれも上方で成功をおさめ、待望に応える形で江戸へ下った。そして、江戸でも若女方として高い人気を獲得し、谷島主水の「夕霧」、荻野沢之丞の「嫁鏡」、袖岡政之助の「薄雪」、といった当たり芸は、元禄後期に至るまで変わらぬ価値を持って江戸の人々に認識され、通用し続けていた。誤解を恐れずに言えば、役者にとって当たり芸は、さまざまな方面への宣伝効果を持ち、高収入を約束する財産であったと見る事ができるだろう。

大芝居で確立した人気は、特に若女方にとって、芝居町を離れたところにまで有効に働くものであった。谷島主水と荻野沢之丞の場合は、香具店という商売の成功へと結びついている。そして、藩邸上演記録の調査を通して、谷島主水、荻野沢之丞、袖岡政之助が三人とも、大芝居を引退した直後から、屋敷方の座敷芝居では盛んに上演活動を行っていたことが知られる。

本稿では、現在までに座敷芝居での上演記録が確認される三人の若女方を取り上げた。今後、調査が進めば、さらに他の若女方についても、同様の事例を見出すことができるのではないかと考えている。特に、元禄八年（一六九五）十一月、京から江戸・市村座に下った若女方水木辰之助は大評判となり、その人気はさまざまな影響を与えた。そうした実態を具体的に知るためにも、藩邸資料が有効な手がかりとなるかもしれない。

〔注〕

- (1) 井上伸子氏「江戸の女方」『立教大学日本文学』四〇号、昭和五十三年七月。
- (2) 拙稿「享保期江戸歌舞伎における屋敷方と芝居町の様相―加賀藩邸上演記録を中心に―」『芸能史研究』一七四号、平成十八年七月。
- (3) 武井協三氏「座敷芝居の盛行」『若衆歌舞伎・野郎歌舞伎の研究』平成十二年・八木書店。
- (4) 天理図書館所蔵の狂言本（近世文芸叢刊別巻三『翻刻絵入狂言本集』上、昭和四十八年・般庵野間光辰先生華甲記念会）による。
- (5) 『歌舞伎評判記集成』（岩波書店）より引用した。括弧内の数字は、ローマ数字が二期二期の別、丸で囲んだ数字が巻数、漢数字が頁数を示す。役者評判記の引用については以下同様。
- (6) 武井協三氏『役者大鑑合彩』の成立」（注（3）前掲書）参照。
- (7) 宮本瑞夫氏『岩瀬本『役者大鑑』の成立』『日本演劇学会紀要』一五号、昭和五十年）参照。
- (8) 土田衛氏『歌舞伎年表』補訂考証 元禄篇其二」（武智雅一先生退官記念国語国文学論集」（昭和四十七年、同刊行会）参照。
- (9) 土田衛氏『歌舞伎年表』補訂考証 元禄篇其二」（『愛媛大学法文学部論集』文学科編第四号、昭和四十七年三月）参照。
- (10) 早稲田大学演劇博物館所蔵の役割番付による。歌舞伎年表研究会「宝永以前歌舞伎役者年表」（『近松研究所紀要』七号、平成八年十一月）参照。
- (11) 武井協三氏「榊原文書の芸能記録データベース化の研究」（平成四年度科学研究費補助金研究成果報告書、平成五年三月）

による。

- (12) 東京大学史料編纂所蔵「宗家史料」。マイクロフィルム（「対馬宗家文書」第二期「江戸藩邸毎日記」平成十三年十一月・ゆまに書房）による。

- (13) 氏家幹人氏『守山日記』にみる（かぶき）終焉の時代像―寛文と元禄期における作法の形成―（『江戸の芸能と文化』昭和六十年・吉川弘文館）参照。引用は茨城県立歴史館所蔵の撮影資料による。

- (14) 林公子氏「大名屋敷における歌舞伎」（岩波講座歌舞伎・文楽『歌舞伎の歴史Ⅰ』平成九年・岩波書店）。

- (15) 注（9）参照。

- (16) 祐田善雄氏・鳥越文蔵氏編『上方狂言本』四（昭和四十三年・古典文庫）。林京平氏編『元禄上方狂言本集』（昭和六十年・早稲田大学蔵資料影印叢書）。

- (17) 高野正巳氏「元禄歌舞伎狂言本『嫁鏡』の発見―女武道研究のポイント―」（『国語と国文学』四八一、昭和四十六年一月）。

- (18) 岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵。拙稿「屋敷方における御出入り役者の動向―岡山藩池田家・歌舞伎上演記事を中心に―」（『歌舞伎研究と批評』三二、平成十五年八月）で紹介。

- (19) 武井協三氏『弘前藩庁日記』―解説・本文・影印―（注（3）前掲書）。

- (20) 注（14）前掲論考。

- (21) 東京芸術大学所蔵。高野辰之氏・黒木勘蔵氏校訂『元禄歌舞伎傑作集』上巻（大正十三年・早稲田大学出版部）参照。

- (22) 加賀佳子氏・武井ゼミナール「初代団十郎の願文―解題と翻刻―」（『演劇研究』十七号、平成六年三月）。

〔付記〕

資料の閲覧に際して、関係の諸機関に便宜をはかって頂きました。ご高配に深く感謝致します。

本稿をまとめるにあたって、武井協三氏から貴重なご教示を賜りました。心よりお礼申し上げます。

なお、本稿は平成十九年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による成果の一部です。